



NEWS LETTER

広島大学大学院国際協力研究科

〒739-8529 広島県東広島市鏡山1-5-1 TEL(0824)24-6905,6906 FAX(0824)24-6904
<http://www.idec.hiroshima-u.ac.jp/info/index-j.html>

Second Asia Multinational Round Table Conference “INTERNATIONAL EXCHANGES IN THE COMING GENERATION”

Akimasa Fujiwara (Associate Professor) and Yusuke Kanda (M2 student)



A Scene of the Round Table Conference

The Second Asia Multinational Round Table Conference “International Exchanges in the Coming Generation” was held in October 21 at Hiroshima University Assembly Hall supported by Mazda Foundation, with around 100 participants mainly including the students who have participated in the last five years’ exchange projects from Thammasat University and Hiroshima University. The purposes were to summarize the results of the past exchanges between Japan and Asian countries and to get an appropriate perspective on an academic educational exchange and scientific technological cooperation in this region. Prior to the round table conference, Prof. Fukuoka (Faculty of Engineering) gave an introduction lecture entitled “Toward more sophisticated technological exchanges in Asia: A case of intelligent supports by civil engineers”. Prof. Fujiwara (IDEC) followed to summarize the international exchange program between two universities from 1995-1999, which was supported by Mazda Foundation. Then, Prof. Mori (Research Institute for Higher Education) reported on the survey results concerning the evaluation of engineering education systems in Japan.

The panel discussion, which dealt with the benefits

and future direction of the international exchanges among Asian countries, was held during the second part. Prof. Kimio Saito (IDEC) and Mr. Hiroki Kinoshita (Master Course student, Faculty of Engineering), who were moderators, led active and vigorous discussions. The panelists consisted of junior and senior panelists as shown in Table 1. The former were students and engineers who have had experience of academic exchange or have engaged in practical international cooperation. The latter made comments and conclusions based on the juniors’ discussions. A conclusion of the discussion was the importance of continuing the academic international exchange program. Furthermore, it became clear what the students in the area of engineering should do. Finally, we greatly express our gratitude for all concerned.

Table 1 Panelists of Round Table Conference

Junior Panelists: Y. Kanda (IDEC), N. Poovarodom, P. Jariyathitipong (Thammasat Univ.), S. Kakida (Pacific Consultants International), S. Funahashi (Maeda Corporation), Y. Nagatsuka (Osaka Univ.)
 Senior Panelists: T. Seki (Osaka University), K. Lertpocasombut, V. Boonyapinyo, D. Wantanakorn (Thammasat Univ.)



Panelists from Thailand

北京大学アジア・アフリカ研究所との部局間交流協定締結

開発計画講座 山下 彰一

1. 交流の経緯

北京大学との交流は、1983年の広島大学訪中団に本研究科山下彰一教授（当時経済学部）松尾雅嗣教授（平和科学研究センター）が参加、北京大学等での研究交流から始まった。

交流協定に関しては、1998年はじめに山下教授が北京大学を訪問・打診、1998年12月には、山下、浜渦哲雄、金子由芳各教官が北京大学を訪問、副学長、アジア・アフリカ研究所（以下ア・ア研究所と略称）李玉所長と協議し、協定締結の話を進めた。

1999年12月、本研究科上記3名が北京大学ア・ア研究所を再訪、李玉所長との間で部局間交流協定締結の早期締結について話し合い、李玉所長の訪日を待って2000年5月27日、中山研究科長との間で協定書を交わした。

2. 北京大学及び同大学アジア・アフリカ研究所概要

（1）1998年に創立された北京大学は総合大学で、1999年の在籍者数は修士課程4,907名、博士課程2,000名を含めて計16,363名である。世界の75ヶ国から1,104名の長期留学生を受け入れ、専任教師は1,962名、うち教授721名、助教授681名がいる。国際交流にも積極的で、約50ヶ国・地域の165大学と大学間の交流関係を結んでいる。

（2）ア・ア研究所は、1964年春に設立され、主としてア・ア地域や国家の政治、経済及び国際関係の現状を研究し、兼ねて歴史、社会、文化、民族、宗教等も研究対象としている。ア・ア研究所は、1999年に国際政治系（学部）及び国際関係研究所と合併して国際関係学院（院長：中国國務院副總理錢其琛氏）となり、教授23名、助教授30名を含む教師70名体制となった。学生は修士課程273名、博士課程103名を含めて合計942名いる。本交流協定締結により3部局全体の教官、学生との交流が可能となった。



2000年度ユネスコ・アペイド広島国際セミナーを終えて

広島大学アペイド事業実施専門委員会委員長
教育開発講座 田畑 佳則

10月24日～11月1日の日程で、今年も、ユネスコ・アジア太平洋地域教育革新プログラム（Asia-Pacific Programme for Educational Innovation and Development）略称：アペイド（APEID）の国際セミナーが国際協力研究科をメイン会場に開催

された。このセミナーは広島大学では1987年から続けられているもので、今年で14年目になる。今年のテーマは「教師の待遇改善」であった。

セミナーはバングラデシュ、中国、インドネシア、マレーシア、ネパール、フィリピン、タイ、ベトナム及び日本の9カ国の専門家と、バンコクのユネスコ・アジア太平洋地域中央事務所（UNESCO-PROAP）のワン・イーピン氏を迎えて開催され、学校教育に有能な人材を確保すると共に、教師の力量を一層高めていくためには教師の待遇はいかにあるべきか、また、いかに改善されるべきかについて熱心な討議が展開された。

セミナーでは、招聘者により、各国の教師の待遇の実態について報告がなされた。その後、広島県教育委員会でのブリーフィングや、世羅町大見小学校での先生方との意見交換等をおして日本の教師の待遇について理解を深めた。また、広島市教育センターの訪問をおして日本の教員の研修制度や教師がおかれている状況などについても理解も深めた。訪問で得られた知見に基づいて熱心な討議が続けられ、最終日には取り組むべき課題が確認されて、幕を閉じた。

例年、このセミナーは夏季休業期間中に開催されていたが、昨年と今年は時期をずらして、後期開始後に開催した。多くの学生の参加を期待したが、授業と重なったためか、完全に的はずれて、学生の参加はいうに及ばず、アルバイトを捜すのすら大変な状況であった。来年は夏季休業期間中（9月）へ戻したく思っている。みなさん方の積極的な参加を期待したい。



JICA獣医技術研修員がIDECで視察研修

開発技術講座 中尾 敏彦

北海道で獣医技術研修を行っているJICA研修員が10月12日にIDECと大学附属農場を訪れ、半日間の視察研修を行った。これは、北海道獣医師会がJICAの委託を受けて、開発途上国の獣医師の専門知識と技術の向上を目的に数年前から実施している3ヶ月間の研修コースの中の視察研修プログラムの一環として実施されたものである。

一行は、アルゼンチン、ドミニカ、ジャマイカ、ケニア、サウジアラビアおよびザンビアの大学や政府機関に勤務している獣医師6名と、国際協力センター研修監視員、それに北海道獣医師会会長の金川北海道大学名誉教授の8名。当日は、宿泊先のJICA中国国際センターから、まず、附属農場を訪れ、牛舎を視察しながら、三谷教授より農場概況や牛の飼育管理システムについての説明を受け、熱心に研修を行った。その後、マイクロバスでキャンパスを一巡りし、車内から主な施設等を視察した。

IDECでは、先ず、中山研究科長からIDECの教育研究活動の説明を含めた歓迎の挨拶があり、次いで、金川北獣会長より今回の訪問に関してのお礼の挨拶があった。その後、研修員の簡単な自己紹介とIDECからの参加者の自己紹介があり、コーヒブレイクの後、熊谷助教授から「熱帯アジアの在来家畜の生産能力に関する国際共同研究の概要」についての、そして中尾教授からは「高泌乳牛における繁殖上の問題」についての講演が行われた。このIDECでの研修会には、JICA研修員を含め、IDECの教員、院生、および生物生産学部の学生など約40名が参加した。

JICAの研修員達は、IDECにおける国際協力関係の教育研究内容を知ることができ、また、関係者と交流できたことに満足した様子であった。研修員達の帰国後の活躍を期待したい。



平成12年度公開講座を終えて

世話人 田畑 佳則
(教育開発講座)

平成12年度のIDEC主催の公開講座は教育コースが中心となり、「アジア・アフリカの教育課題と国際協力」(講師：中山、平川、岩崎、堀田、田畑)のテーマで、10月5日から11月2日まで、毎木曜日(18:00-20:00)計5回、広島市中区にある県の国際交流施設「ひろしま国際センター」で開催した。なるべく多くの市民にとの趣旨から、広島市内で試みたわけである。

受講者は21名(定員30名)で、大半は女性、特に20才代の女性であった。受講生の関心は多様なように見受けられたが、それぞれ問題意識は高く、専門的で、かなり深い分析が求められているという印象をもった。全体を通して出席率は高く、最終的には17名に修了証書(8割以上出席)を手渡すことができた。

最後ではあるが、講義をいただいた講師の方々や、広島へ向いて会場の準備、受付等、お世話いただいた学生係の方々に、この場をお借りしてお礼申し上げたい。



シリーズ国際機関

財団法人 ユネスコ・アジア文化センター Asia / Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)



総務部総務課企画室
池添 敬道

ACCUは、ユネスコの基本方針に沿って、アジア・太平洋地域のユネスコ加盟各国の『文化の保存・活用』、『図書開発』、及び『識字の振興』に寄与するために、民間の有志と政府との協力によって1971年に設立された財団法人で、主に以下の3分野における国際協力事業を展開している。

(1) 求められる図書・教材開発

子ども達に廉価で質の高い本を供給し、国際理解の精神を養うことを目的とした出版事業や、新識字者の生活改善に役立つ教材制作事業等を実施している。

(2) 人材養成の必要性

教材制作担当者及び彼らを指導する専門家の養成を目的とした研修事業等を開催し、また、各国のニーズにきめ細かく応えるため、ワークショップ開催国に講師団を派遣している。

(3) 拡大する情報交流

各国との協力体制の強化のため、機関誌の発行及びインターネット上でのデータベース公開等、情報の交流には格段の努力をしている。

事業の特徴：「共同事業方式」

各事業は、各国との「共同事業方式」で推進される。これは、事業の企画から、内容の原案の提供、英語によるマスター版の作成、自国語教材の作成と普及に至るまで、各国が自発的かつ平等な立場で参加し、成果を共有する方法で、高い評価を得ている。

近年の動向

1999年に、文化遺産保護協力事務所を奈良に設置し、各国の世界遺産等を含む文化遺産のデータベース構築に取り組むとともに、若手専門家、行政官等の研修を実施するなど、国際協力推進を新たに展開した。

2000年からは、『ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業』を開始した。この事業は、域内の学生、教員、ユネスコ関連事業専門家等に、異なる文化や価値観に接する機会を提供し、地球的課題の解決に向けた人材の育成に寄与する。

新世紀もアジア・太平洋地域の国々と協力して、教育・文化のさらなる発展を願っている。

(連絡先)

(財) ユネスコ・アジア文化センター

〒162-8484 東京都新宿区袋町6

TEL : (03) 3269-4435

FAX : (03) 3269-4510

E-mail: general@accu.or.jp

URL: <http://www.accu.or.jp/>

シリーズ研究室紹介

- 野原研究室(社会制度論) -

見果てぬ夢

社会動態講座 野原 光

こちらには札幌ラーメン、あそこは尾道ラーメンで、向こうに行くと、博多ラーメンが店を出している。とはいえどれほどラーメン店のありかを知っていても、それだけでは本当のラーメンの味を見極めることは出来ない。要するに、対象の知識という意味での情報をどれほど持っていて、その情報を見る眼がなければ、その情報を生かすことは出来ない。とりわけ情報の氾濫とその変化の激しさで特徴付けられるこの時代においてこそ、見る眼を鍛えなければ、新しい情報を追うだけで全エネルギーを使い果たしてしまい、けって主体的に生きることは出来ない。2~3年しかもたない論文を乱発してそれがなんになるのか。

だから生命線は如何に眼を鍛えるかにある。極端に言えば、鍛え抜かれた眼さえ持つことが出来るならば、研究の対象はラーメンでも、蕎麦でもかまわない。肝心なことは対象ではなく、方法にある。鮮度ではなく、掘り下げの深さである。それでは情報を見る眼は如何にしたら鍛えられるのだろうか。少なくとも第一に、その眼を鍛えたいという抜き差しならない欲求がなければならない。そのためには自分のおこなう研究が、自分の一回限りの生の不可欠の一部になっていなければならない。そうでなければひとは、なにより先眼を鍛えたいとは思わないだろう。つまり、何のためにその研究をするのかという問いへの答えは、同時に私は如何に生きるのかという問いへの答えの一部とならねばならない。だから我々の営みは社会科学ではなく、「社会に対する我々の認識」なのである。

第二には、何千年もかかってゆっくりと人類が積み上げてきた知的共同体の遺産、ここから十分に学ぶ必要がある。我々ひとりひとりの思いつきなどたかがしれている。5年、10年の新奇な激変になにほどのことがあろうか。屋久島の杉は1000年を越えて地球を見ている。聖書の歴史は2000年を越え、ギリヤ悲劇はなお現代人の心をうつのである。今こそ、この遺産に

支えられて、自分もまた100年はおろか、1000年の尺度での人類史に、無数の働きバチの一人として、おのれの生を結びつけるべきではないか。「世の栄達は何のあたひあろうぞ」。What's new?ではなくて、What's true?これが私たちの関心事とならねばならない。

世迷いごとを並べるうちに、危うく研究室の紹介を忘れるところであった。元請け=下請け企業の共同開発を調査するひと、中国と日本の失業対策を比較するひと、企業社会からのドロップアウト層に新しい生活規範の形成を見るひと、日本の生産システム再編に途上国への技術移転の可能性を見るひと、ボランティアの自発性に社会参加の新しい質を見るひと、女性の雇用差別が、実は人間蔑視そのものだと見るひと等まことに雑多である。なにが共通かといえば、これまで纏々述べたような点での方法意識の漠然とした共有と、異なった諸社会の比較を通じて、自分の社会を発見したいという願いであろうか。



Assalaam alaikum.

教育文化専攻・後期課程 近藤 高史

国際協力研究科の皆様、お元気ですか。私は今、(社)国際交流サービス協会の派遣員として、2年間の囑託契約でパキスタンのカラチ市におります。日本国総領事館で働いております。留学というわけではありませんので、仕事に追われなかなか自分の時間を見出せずにいます。ですが私にとって初めての海外長期滞在経験となりますので、パキスタンについての見識を深め、語学力も身につけて帰国したいと考えております。

こちらに来て9ヶ月が過ぎようとしています。私の場合、南アジアの地域研究を専門としていたことからそれなりにイメージを抱いてカラチへ赴任したのですが、研究することと実際に住んでみることは大違いでした。「カラチ」といいますと世界でも治安の悪い都市として知られていますが、聞いているほど悪い、というわけではなく、夜間外出や危険な場所を避ければ街中も一人で歩けます。また、今は軍政下におりますのである程度息苦しい生活を予想していたのですが、言論統制などは行われておらず、新聞各社も政府の批判記事を堂々と書いています。それより日本での便利さの中で育った私にとって厳しかったのはむしろ頻りに起こる停電や断水、電話の不通など、生活面の不便さでした。ちゃんと料金を払っているのに、料金を納付したその翌日に電話が止められるなど、最初はかなり面食らった部分も多かったのですが慣れてしまった今はそれほど苦にはならなくなりました。

とはいえ、最初は何もかもわからないことばかりで生活環境を構築するの

に時間がかかり、まともに勉強を再開したのは6月くらいからでした。仕事が結構忙しくて書店や図書館を回る時間もなかなかないのですが、近頃は日本に行ったことのある留学生や、こちらに来ている日本人と一緒に勉強したりなど、「学生らしさ」が回復でき、当初よりは充実しています。ただ毎日のように痛感していることは自分の語学力不足です。英語にしても日常会話については何とかできますが、少し自分の専門から外れた内容や細かな話になると相手の言っていることがよくのみこめないーしゃべれないということになってしまいます。また、当地の国語であるウルドゥー語も、少しは聞き取れるようになりましたが、文章を読むとなると1ページ読むのに数時間かかっています。

苦労話のようになってしまいましたが、それでも、こちらに来て研究対象を自分の目で見、いろいろな経験できることは素晴らしい財産です。最後になりましたがさまざまな面でお支え頂いている教職員の方、研究科学生の皆様方には心から感謝させていただきます。(2000年12月8日記)



カラチ日本人会運動会にて(筆者は下右)

IDECアジアセミナー

第57回(2000年5月25日)

Personnel Management in Inter-cultural Business

(異文化経営における人的資源の管理)

奥中正之(広島経済大学・講師)

(担当: 山下彰一)

第58回(2000年6月26日)(総合地誌研究資料センター共催)

The Urban Future of Vietnam Reconsidered

(ベトナムの都市化の将来を再考する)

Professor Terry G. McGee

(ブリティッシュ・コロンビア大学アジア研究所教授・前所長)
(立命館大学客員教授)

社会主義国からドイモイによって急速にグローバル経済システムに統合されたことにより、ベトナムの都市化にその経済成長の特徴が現れ始めた。急速な都市化の中、形成された3つの都市圏では都市のスプロール現象が見られ、連結の動きも見られようとしている。その他にもベトナム戦時経済下の都市人口情勢、華人人口の国内での人口移動の動向、など、都市の成長を詳細にわたって東南アジア研究の長い経験から、他国都市の状況とも照らし合わせながら紹介した。

(担当: 澤 滋久)

第59回(2000年7月11日)

在日韓国・朝鮮人のアイデンティティ

李 光奎(ソウル大学名誉教授、国際協力研究科客員教授)

Korean Japanese is by-product of Japanese society. But they show also the characteristics as normal minority. This characteristics is the pendulate theory. The first generation of Korean Japanese is characterized by the enthusiasm toward their natal country. The second generation has interest within the host country, dedicating themselves toward the campaign against discriminations. But the third generation has interest toward the culture of their nation of origin.

Current Conditions of Korean Immigrant Churches in the United States: A Sociological Analysis.

(米国における韓国移民教会の現状:社会学的分析)

Professor Eui Hang Shin

(South Carolina University)

(担当: 崔 吉城)

第60回(2000年8月4日)

Ethnicity Conflicts and Management in South Asia

(南アジアにおけるエスニシティ紛争とその管理)

Professor R. C. Sharma

(University of Nagaland,
(Former Professor, Jawaharlal Nehru University))

Ethnicity recently became a factor of destabilization in South Asia. It is a subject matter and the political elite subjectively interpret it. Johan Galtung's model of structural violence can be applied to the problems of

ethnic conflicts including Sri Lankan crisis and others in the region.

(担当: 吉田 修)

第61回(2000年10月12日)

変革期における異質な考え方

黒川和直(前Maxwell Europe社長)

黒川氏の豊富な経験に基づいて、多様な論点について熱いメッセージが投げかけられた。国際化の進展によって、異質な文化や価値観をもつ人々が一つ組織で協働する時代になったこと、組織の原則とメカニズムを確立することの重要性が多く例を交えながら説明された。講演終了後は、黒川氏の夫人も加わってコーヒープレイクをしながら2時間近くフリーキングが行われた。約20名の学生が参加した。

(担当: 金原達夫)

第62回(2000年11月13日)

New Age Regionalism in East Asia

(東アジアにおける新時代の地域主義)

加賀美充洋(JETRO・アジア経済研究所理事)

(担当: 山下彰一, 高橋与志)

第63回(2000年11月14日)

A Look at Endangered Philippine Wildlife Species with Particular Reference to the Tamaraw (Bubalus mindorensis)

Dr. Ceferino P. Maala

Visiting Professor, IDEC,

(Professor, College of Veterinary

Medicine, University of the

Philippines Los Banos)

The tamaraw is a small buffalo found only in the island of Mindoro, south of Manila. It closely resembles the Philippines carabao except for its massive horns which grow upward and straight caudally forming a "V". Its population is down to only 300 heads now due to wanton destruction of its habitat and poaching. Various conservation measures have been instituted to protect the remaining tamaraws in the wild such as the Tamaraw Conservation Program (TCP). This project is concerned with the restoration of the tamaraw's habitat, conduct of information and education campaign, and population and habitat studies.

(担当: 中尾敏彦)

第64回(2000年12月7日)

Problems of Politics in Pakistan

(パキスタン政治の諸問題)

Professor Mohammad Waseem

(Quaid-i-Azam University, Pakistan)

Politics in Pakistan was first dominated by the muhajirs or migrants from the territories in independent India and then by Punjabis and Pathans. The political elite thus lack the constituencies and rely more on Islam than on democracy, although they are modern and socially progressive.

(担当: 吉田 修)

修了生の進路

2000年9月 博士課程後期
開発科学専攻1名(内留学生1名)修了
教育・公務 0名
民間企業 0名
進学 0名
その他 1名
(帰国(バングラデシュ)1名)

2000年9月 博士課程前期
開発科学専攻7名(内留学生5名)
教育文化専攻2名(内留学生1名)修了
教育・公務 0名
民間企業 1名
進学 3名
その他 5名
(帰国(バングラデシュ, 中国, タイ)
4名, 就職活動中1名)

ようこそ IDEC へ

10月入学 博士課程後期
開発科学専攻4名(内留学生4名)
教育文化専攻6名(内留学生5名)
博士課程前期
開発科学専攻15名(内留学生14名)
教育文化専攻9名(内留学生8名)

スタッフの人事異動

■ 転入等 ■

[教 官]
H12.7.1 採用 外川昌彦 助教授
H12.10.1 配置換 肥後 靖 助教授
(工学部より)

客員教授・客員研究員の紹介

[客員教授(外国人研究員)]

氏 名: Telles, Joao Antonio
(テレス, ジョアオ・アントニオ)
出身 国: ブラジル
出身国での所属: サンパウロ州立大学・助教授
研究 題目: 第二言語教育の方法に関する研究
滞 在 期 間: 平成12年10月1日~平成12年11月21日

氏 名: Maala, Ceferino Pambuena
(マアラ, セフェリーノ・パンプエナ)
出 身 国: フィリピン
出身国での所属: フィリピン大学・教授
研 究 題 目: 反芻動物の被毛の形態と栄養状態の関連性



滞 在 期 間: 平成12年10月1日~平成13年3月31日

新任スタッフの紹介

[教 官]

外川 昌彦(とがわ まさひこ)
教育文化専攻・文化動態講座・助教授
1997年慶應義塾大学大学院社会学研究科
博士課程単位取得修了
博士(社会学), Ph.D.
新潟県出身



肥後 靖(ひご やすし)
開発科学専攻・開発技術講座・助教授
1979年大阪大学大学院工学研究科造形
学専攻博士課程前期修了
工学博士
大阪府出身



カレンダー

2001年1月~2001年6月

2001年
1月19日 教授会
1月31日 修士論文提出締切
2月2日 教授会
2月8日 修士論文発表会
2月15日 博士課程前期第二次募集・後期 入試
(~16日)
平成12年度第2回総合試験
2月16日 教授会
2月23日 博士課程前期第二次募集・後期 合格発表
平成12年度第2回総合試験 合格発表
3月2日 正教授会, 教授会
3月22日 教授会
3月23日 学位記授与式
4月3日 入学式
4月20日 教授会
5月18日 教授会
6月22日 教授会